

2280

當日奇觀

二

鑑月寺觀去已之集一



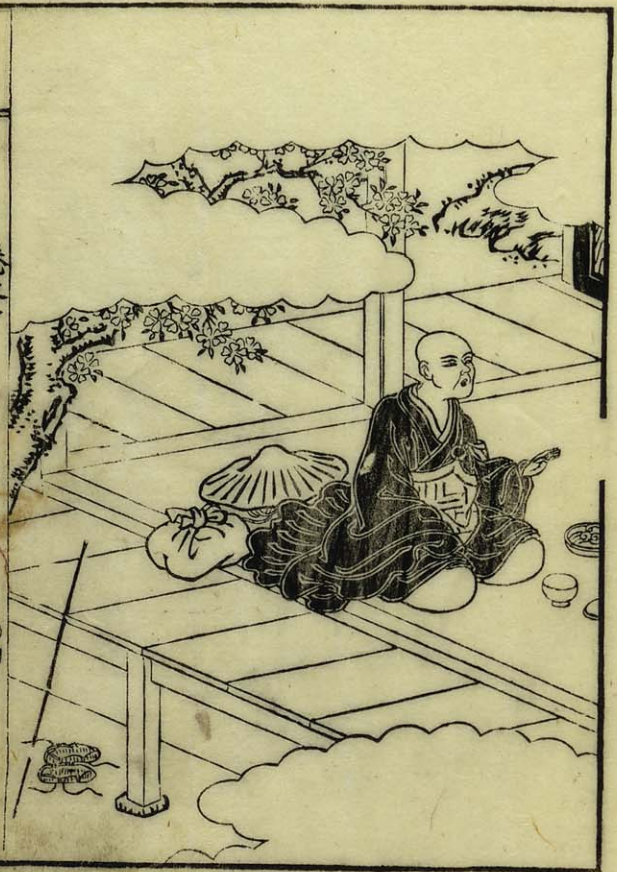
在原業平文海は詠人室と稱す
天の頂都相國寺に文海と云く傳わり禪誦の暇和歌と云く道
遠院壁のり人長義林は文字禪乃風韻と云く一時の奇事あり
し其頂に至向家義時乃の治世に連多干文息時を西園中國
之内毛初の確執東國に北條今川北條の出入長尾の合戦等
多將軍家も都と没序く多治中の勤し又花代と類へし
か多まはて奉寺も文文二十多ま七月兵火にかり福堂法堂
残つて焼亡せり文海も安房に在り衣袴と収て東園公
かざり行脚し此律と云く多遊歴するも西多も候り
しに流石都もあやく湯と興り伊勢路に在り神宮に候

巻之三

〇一

を法施奉りたり大和路より右野の花と目をもやせ
各各々々頃餘生の末はて花もいづも教頭と見候も喜
ふくまは山浮く入る日雨は沈まきき後知と花も
かにか人もあきふけと云く多迷行も人かそまか
る多今宵のまを甘んばむ相二所をあのわす花のか
すはあはだぬか家のわんも漸たはらばたまふまふ
りさやらに願違いと云く多心もさ難い人か
文海のまをわ軒のまを柳佃の内を夜を折る草の出
辞といやうに投宿と云く多暫のつて又案内する候
二間も亦は座すまをて茶菓菓子のおもて候り容態わ
終日の餓といはるゝ安印と云く多いり候り此集

やんばもへうもかたうし又伊勢倉宮の二階もさゆり色好の事あるか
と云ふの宮様おちくまをさやうの深活の悪名系のもい連累に秘
宮をも神の御事とていふまじ口あめ身もあやういあやうい
かば或へんかあ姉は懸想し人のむきんをさうぞばをさ
戯れと母も人もあやかりおとさあだの妾誣其罪一人命
千載の浮名と世あやむ若多なり時まは依傍中は密教と習い
とも祇陽の愛より勅袖のきりも停りしゆよといあやう衆悪海女
しん誰一人女の實あたまささやうさあめいとも伊勢とのあ
あやう作者者よりささうあ御も実の貝米親王のよにきひ
いま名ひりくと後り假名文字よあやう物に古今のし序を
ト頼ありとまやうあれお謀の又解きの意とのて陰手と海女



とのありをけに有とまじくそのさまを二轉く風情のそら
 作おほの體ありをよ頭定名をも詞花と言を多と歌ふるそありと
 ところまの格言はて定録のごとく多月日時と句 雜のそあり
 どもゆふそいとゆさまはて唐采の詩も詩とそ意と定書りこそか
 かまとしてかましく大和あはれもまはたはまはるそあり興よりゆ
 ふまへそ一文字のそありまともまると彼おほはらまよと又一轉
 風情をまじたるそありまの詞花言をそあり外の唐采乃
 詩に漢に游女あり求むるをばわのり後世附會く轉詩外傳
 にありそ孔子阿谷らつそありてそありはそありそあり路も命とて
 佩を賜りまひそありそありそありそありそありそありそありそあり
 たけいおとそありそありそありそありそありそありそありそありそあり

ありし人としてより人の聖なる秋胡子と爲る人とは分りて居るなり
未だ此の書ありて國の定法を書法多と傳記の言はばたますく子
やまは後世にせしむるの豪家権門の人の文人といふ傳記を磔銘
と彫く事と飾り虚と稱す日盜跖の者ありて夷簡とあるの類
わづらひて文とをより行実ありとの多き時に紀傳する定説
とありてやして作り物語の風流なり誰れとぞいふともありて首
或男とせしむる一徹ありし事なきとをを儼人の志友と説り
類ありてむし光明皇后の淫亂ありしも法皇に阿闍佛とてい
しと傳へて須道明は師の聖行ありしも五條の天神隱居にありて
只説ゆる事なき事あり佛林の菩薩は感應ありていふ事あり
ありし事ともまを觀善の化身ありていふ事ありていふ事あり
ありし事ともまを觀善の化身ありていふ事ありていふ事あり

かへ人の嘲と生ずる言あり是を秘臣の作り物なりといはれ欲り
釣とせしめて佛をたのむる事ありていふ事ありていふ事あり
の類ありて會一楊柳觀音ありていふ事ありていふ事あり
まはらるるあり光明皇后が慧輪の化身とていふ事ありていふ事あり
たりとていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
儼の語をまはらるる口破りのものありて傳記を載し疑ふ事ありていふ事あり
の中二もの事ともいふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
語ありて後世識傳の書と作りていふ事ありていふ事ありていふ事あり
せんありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
ありて佛菩薩神の化身ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
公とせしむる時平義経と敵ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

こと漏ちとびたり虚誕の過差いあるを唯荒淫放蕩の
行をそとく時の勢もまじり又因は遊んでる人首に載らざるべし
彼方の二条の居末宮の沖息方へとりりたる屏風に龍田川は江ふみ
るすしごとくもさかしくと題はてふ性法師とけくすなる事趣意
龍田川は紅葉散りてほくと足練を鎮柳のつら涿とをあらばま
るおてがるはとつりもつら涿にもあまふおいらたれ神の沖代は
さみぐわゝもまもさかきとよもがる倒れ候もよとよもなるあは
題にも進み趣も風情あつやもめ給るものこの酒より水とろと
くり濁りしよとあらせり紅い川の川水と涿なる何々のあなるさ
まの侍はさくら涿のかめさもなら候てつりもそとせ樂まよき鎮
鎮と鎮しり類わるとるさまの濁りてをよとを逐まらば

卷之三

癖ありとてさかき一定の親とありたり候て讀み癖とて
さつものさぬあるはさくさくは癖とてさそとの非あると
ありさかき人は癖ありしはさかき趣しとさかきよりさかきとて
文字を侍てしむさささとも世傳へまつとておは諸りなき
大海云々も知しし和字をたし候りか伊勢お詰りしりてん君と
平く荒淫の方あさもも人さそを言はんとせんぬとて取ま教りり
家かこげまへなりし事のはらさこも其上百人首の讀み癖と
と風情も雲泥のまひわらせ考述とてさかきとてなるとおは世
に傳へて委評とたりまらばさかきも君は山國にて昇仙たひ
しと傳へられ実まはけ今日が御見し書もはやしよましり笑
昇仙の語らそと頃虎園かえき初書より抄りてとてしよとて

さのハ内成院淨世とありたん孝四多音白の事とありたりと
家國ハ仙人のすゝめとて徳光社撰しとあり今も跡を仍りとあり
久留とまた文海の後今日サ在信神楽の減びたりとあり也
傳形とありし相見りたり事也也とありと事ハあり事也此事
たりとあり事也此は信成夜とて信成山路の迹も事也
之夜のめんとて入國の殿よりた文海も居たり事也此は
ちなき寺の迹也とありと事也此は圓とあり事也此は圓のや
りて松林しとあり事也此は祠のやとあり事也此は祠のや
は無下りく事也此は事也此は祠在原明神なりと事也此は奇異
の事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也
之書も事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也

卷之二

將軍義輝弒せし事都の騷動前事には事なり又も
諸國に事ありあり事也此は事也此は事也此は事也此は事也
守の河原許に也諸したりと事也此は事也此は事也此は事也
奇怪ありと事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也
て思ふ事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也
也諸のむし男もわを被く事也此は事也此は事也此は事也此は事也
渡りたる事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也
もの業平一人に限る也揚貴妃玄宗の寵愛ありと事也此は事也
宮女も顔事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也
人とも種類あり貴妃ハ廣西番禺縣雲霞とあり事也此は事也
質あり也揚康求て事也此は事也此は事也此は事也此は事也此は事也

喜王の宮に在り其頃、列人の言も、倭に在り、よ、玄宗の御代に
 是より、より、玉座と云はる、こゝに、收心、終心、の、公、あま、江、眼、中、西、施、と
 出、との、種、を、一、聰、明、伶、利、の、論、り、毛、播、西、施、と、け、ら、る、人、あ、ら、は、ま、か
 宗、高、力、ま、し、た、を、も、る、を、あ、り、せ、る、あ、ま、あ、ら、ん、と、況、や、貴、妃、體、肥
 滋、く、暑、と、苦、む、ら、芳、茹、枝、と、好、胡、奥、あ、り、ぬ、外、國、の、名、曲、を
 何、こゝ、と、推、した、り、と、推、して、ま、り、當、時、君、の、執、事、の、詞、曲、に
 余、ん、と、の、美、艶、と、稱、し、た、り、ま、り、所、諷、く、た、下、の、地、と、感、は、ま、り、
 ま、り、衆、大、多、に、あ、り、の、け、ら、て、今、に、て、此、國、の、人、も、女、を、盡、ま、り、男、を
 と、第一、と、い、ふ、男、と、い、ふ、其、来、と、首、と、其、誤、く、ま、り、皆、に、盡、し、
 推、度、の、証、を、り、又、海、ま、又、な、り、時、を、ま、り、ま、り、一、女、と、幸、し、ら、る、と、
 觀、志、化、身、の、説、の、ご、く、あ、り、や

覺州義仲と清和石上院の事

後白河院の死に、女御言通、入る信西と、ま、り、實、實、の、勇、徳、実
 兼の息に、友氏南家の儒流に、資性聰明、類、い、く、ま、り、今、の、流、れ
 に、違、い、詩、文、の、道、を、時、流、ま、り、時、の、人、も、其、流、に、服、し、た、れ、も
 高階氏に、名、つ、と、を、得、儒、官、と、昇、ら、れ、久、く、登、壇、せ、り、ま、り、
 其、母、也、と、後白河院の乳媪、あ、り、と、い、ふ、帝、即、位、の、り、ま、り、親、さ
 ら、り、て、執、遇、を、得、る、也、後、雅、繁、と、言、通、憲、の、名、と、信、西、と、あ、ら、ん、
 ち、朝、政、と、執、り、威、福、を、得、ら、り、ま、り、信、頼、を、し、權、を、ま、り、平、治、の
 乱、を、り、平、相、國、法、盛、又、信、西、常、に、法、皇、に、親、近、し、ま、り、平、氏、の、短、と、ま、り、
 こゝ、と、情、を、く、ま、り、遂、に、執、り、ま、り、ま、り、一、門、教、く、ま、り、中、の、妻、腹、に、八、重
 丸、と、い、ふ、子、に、か、ら、る、と、乳、母、懷、ま、り、津、の、ま、り、居、り、ま、り、南、都、自、福、寺

の衆位しゅうゐのしる親おやさのり寺てらに送りし家いへの世よとほりよの風のりよ
他の世よも侍さむらい一同いっどうに十行じゅうぎょうと讀よみすはの聰明ちやうめいにしてはるまのさるる任まか任まか編あひら
の要ひつよりとこましくまへ終はつりてはは南なん京きやうの傳でん燈とう世よのつや
のいよなり或時あるとき乳母にゅうぼある者ものきたりて世よの成長せいせいはりて收おさむえそふ
かまを又入道にゅうだう殿たに常つねく平氏へいぢの政まつ庭ていと情なほりて其その權けんとを集あつりやして初はつて
禍わざはひとらりてのる腰こし子のこふと早く出いかへ又また君きみの苦くる提ていとめ
まへと涙なみだぬらぬと詩うたと國くにを誇こほりてやとてやとてまも
まことらりてつたはがと相あひま國くにの怒いかりはるま時とき暗くらみのるるひのひ
いらる禍わざはひのそやまめをせんほほは世よの河かわ國くに杯はいとまし
あまもて交まじ知しる人のよありてや侍さむらいり官くわん賢けん世よまへとつたはま
かと割わすもは四よつらつちとあまわりの是これより日ひ夜よまとの罪つみわくはく

卷之二

死しなりと情なほり平氏へいぢととて怒いかり報かへんとほらたれぬ左ひだりの云い
ひめは師しの河かわ國くに杯はい度たくを天あま坊ぼう賢けん明めいとせむる割わ度たの師し命いのち
とては頭あたま技わざ物ものの思おもひをいしよ方かたを報かへし志こころをいしよ
にわたりとて其そのまこととていなりま幸あゆひ二輪にりんのやより橋はし知し曉あきらか軍い
字あざなに連つはる陸りくまのりと師しとたの明あきら若わかき書かきにたてやひ假かりまて交ま
まは其その項むねまへ南なん都と北きた鎮ちん乃のみ象ぞう後ごやもすとい今いま戦いくさにおつ時ときをまは
師しの河かわ國くに杯はい法はふ三さんの十じゅう城じやう中ちゆうのあまをうてんやる承うけいぬ
をまへり聰あきら明めいの留とどめあり情なほりと幸あゆひまはぐは五ごとまのうらに其その家いへ
の人ひと要ひつえを運うんぶの物ものを強つよくことめまは得えて十九じゅうく才さいの杖つゑの頭あたまより
行ゆ脚あしく披ひきり南なんのむと離りさ今の都みやこを登のぼりてうらに其その心こころを居ゐる
れよわは平へい國くにと割わくよの怒いかり報かへて何なにやも相あひ國くに物ものとを茶ちや驅く

路を拂ひつゝ侍衛雲のこゝろに源氏の族老を合ひしりて
 其後教をまゝ素意と違ふことあり明く言はらば東の荒野木茂
 とときゆにこゝろを隔おく東の本陣に家なき下向書
 してはたゞ是れ相國の東に故つて去る夜の時曉つてさへん
 隨身の侍の袖をばねにすゝ根籍有と騒かすにさへ射撃
 たりと跡を晦しては出がまて動靜と伺ふは波瀾あり處々
 のれをひく追捕者達あまへと國は身といふ可く北國とて陸
 此より兎角すゝり其身を明くは承三喜のまき聖のあらへし
 活中さまぐの怪無ありと風國さまは是明をゆより去るは違はれ
 ともふことと考ふるは乱の兆國家の志変らぬはわり知れ
 主事たすて報雙あると違ふはんは其頃不置冠者
 義仲と密に義兵の傳はつてさへん彼人といふはさへも軍
 とはさるやと義仲の結は行く相見とゆるは義仲三曹僧何り
 越るやとわのりてまきく見も實明をんでさ承三喜とのんたをえ
 かくては物をもく平氏の残暴主人の悪むとさ中にも法皇を
 離宮に幽囚しるも古今例なき不臣のあり公卿盡と切らるるも
 力にぞと後よ其毒りとをい諸條入勢し徹りくはあり
 自滅と侍の外なりはやく平治は落とくは初も乱階と半
 てその能とてはむるは相國位人臣ときり三門皆承建下んは
 下とさ分る其二の平氏の領國とる物必事とさい必く會夜消
 息の理あり春さりの天書ゆく其乱の兆はく不日また爰に
 たりさはた時人を制さ此時と虚言をいへるすと紀てん人そ

誠は事偉しとてや君とすく源氏の嫡流諸國離れとのもたつる志
を易くし今之を奪ひよとてあむ賊と討つ下兵復の力に難事
報せしものも白旗を立てて群雄をたふし此時色をばり
と長くの下に屈したまへ賢者とあつと席をたつと中兵衛伊
も席を前へ誠よ公論とて考へ家の中にも指揮はさるらん
ふと内清堂座よりんをばりて門の注進もあつとて懐とのそは
そつて三連堂一人の徳門の墨と掩にたつと杯の水東のあめを消
することわかれば内清堂座天祐の相承との死んとて牙世とさばり
は君とすまて圖りたりとて義伊とて收公あつとて成志有と
ともゆくと謀士と復さるまて後ひてはまのそ貴徳とわとふ
衣はをま子房諸葛なりと別館と拂えまて用ひたりと聖日

卷之三

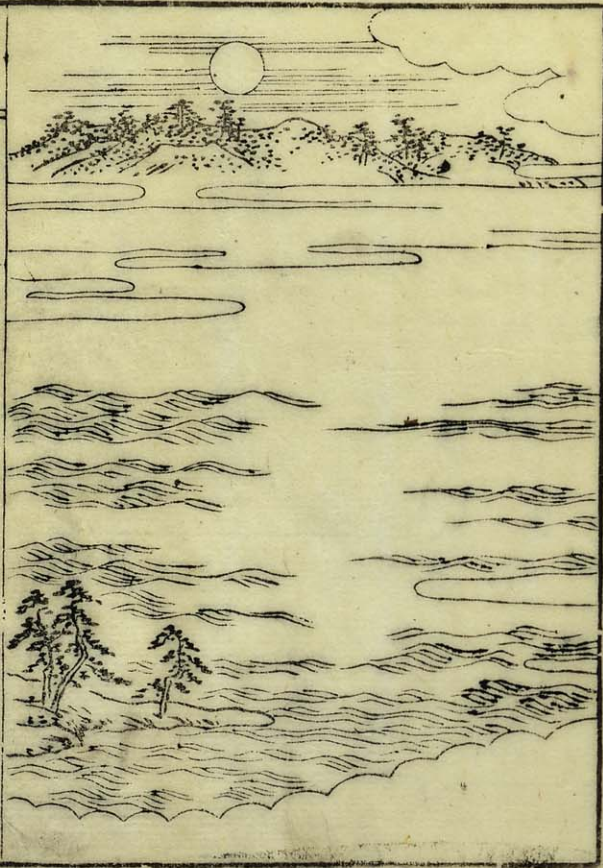
義伊とて使回之云ふ多事多事とて難居りて後下回之のれと書
ゆまの國へともふ敵の動静氏に向付ると宗親とて人多く明と右
北陸の僻境に難居りしゆいとまのれ地邊境をもつとてそめと
あつて後患より退き境を守りてはとてまのやん安かると此中と東
宮とてそ勢を漲るが加賀越前諸ま招りて應は下信は越
後といひ同心の人とまあつて是兵勢と漲り其機と察し多四方のそ
唐といひまをてとまて指をさつと一石六波羅の討つとて考地理はと
弱平峯烟よりそぬ未勢も娘の軍に吉勝をのち其勢にまあつ
長罪して攻奪るゆと誰と遮る者のゆとよとよと近江に作ると木族あり
てと多回後とまのそ力と合んとて必はかりと鼓え都と統率國
怖ると宗とすなりと敢と合戦とて驍勇といふ武よりととら公宇都

動かし平氏内を以て嚙み外を以て御を以て果すの計を以て開く
くは二軍はありて激するまでとばえ近國は皆居る源氏の二軍は
膳人をも御と揚りて御り馳参勢五百騎はわさ小勢ありて下も
勢と登りてとて帯入龍胆の勢も敵の千馬も敵も人としてつらら一
通の願書と語り八幡宮へ御く善義と後其親女を御執事とて
平相國に武家の精練王法の怨欲を書りてと後よ清盛侍へて
此法師と云傳河原に集首せし死すとも腹固りとも憤りてとて
まはるる明か見に差たり聖身の杖を垂れ去りて門を夜を以て
くはくはく人かともたたきた勤と侍り高倉の宮を以て
たらたたま侍りに討破り漏く官もわさ邊邊の平らくも
くはくはく奉り頼政父子もむらう字は清と侍り野都も

卷之二

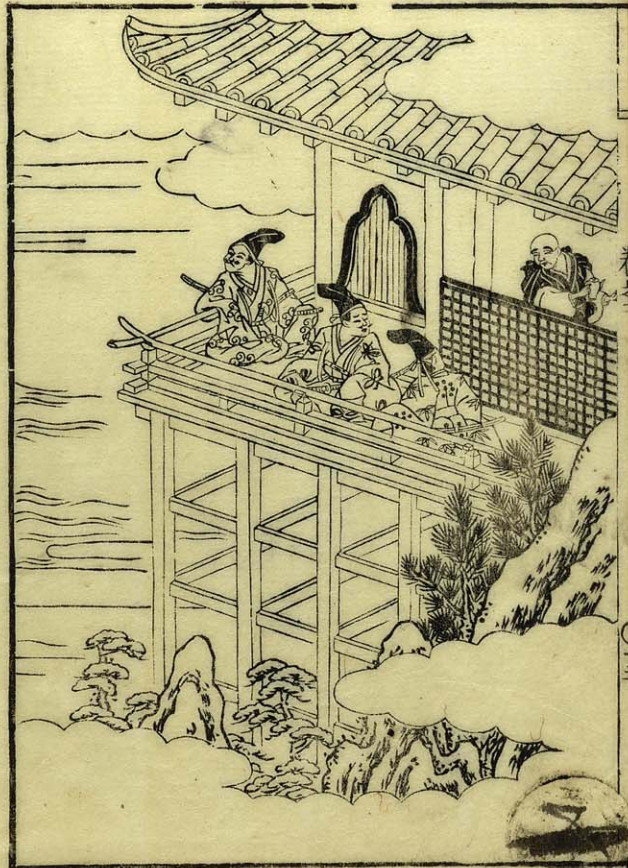
静なりともは官の令旨諸國平らくもひまらも伊豆の頼朝を以
の義侍りとも義共と起り攻登りともて下ふは其を以て攻りて
頼朝連討のたす軍を向りては明討策に以て彼羅智若く
はら肩入敗走すも六後と著る北陸の大軍潮の湧きもく殺到す
るも此後には時とゆる源氏舊恩の諸士地加りて法軍に乱入すも
社の上下其兵聲もくはるも平氏の二門一類もはらざん上
門院を信奉りともは陸家の大の侍りともて西國を以て
彼屋も義侍都よへは皇弟の御りもは御感御りも猶も平氏の
一族と亡り禍の根とら宸様と安んじよとの初とをく都都
軍馬の旁とをひは御りも義侍北陸よわりて一國報難の念よりか
りて都法留のくは目國する所生涯んも別れ繁花風流水とく

ふらうくむく東門圍くわいの女に中ちゆうあどととととつたおの敷うける大宮人乃
ふとやんとあといつふもささへ賊げきの女にで副ふくる似にらけるといふ曾その山やまに
あまふ同どうもと人ひと俗じやくともわやうもささへ六波羅ろくはらの法はふ備び人に度た高樓玉かうろうぎよと
ちりづら海うみをわびぬる者もの後ごとるる下りつやう情なされけりてから地ちに下
半世はんせいの歡くわん事じと移うつるとのあつて人ひと世よのちたはさうととさ女にとわつたえ
日夜にじつ淫いん酒しゆとまると軍ぐん務むとゆふとさゆや戦せんの大功たいこうに公こう情じやうえ放
逸いつの兆しやうとつたよさえ明めい諫けんと云い君きみ世よの逸いつ事じと欲ほつふ女に大宮たいきゆうに
燕えんとゆふ大洞たいどう忽たちちゆふ平氏へいし敗たいきつとささも多た多た恩おん顧この者もの西
岡おかも多た多た虎こと欲ほつふ山やまも入いる執しやくと追おて淵ふちも波なみひつとささもささ
要よう書しよと同どうふく敵てきも備び人に上じやう神しん器きと使しえ諸しよ國こくも合あはせけりたさく勝
るも軍ぐんとささ修しゆる兵へいの神しん速すくと貴たかぶると女にあさうさる可かる今いま欲ほつ



卷之二

〇十四



卷之二

〇十三



軍の怖意さしぬ間、短兵多し攻めあひ、然に橋に下りまき、わ
きも、橋を窮鼠却て、猫を食ひ、鼠の死、後兵加り、橋を滅せ、
その、頼朝義経等の數人の皆故左馬頭の遺子、いへ、已に、我兵と、
何ぞ、及、下、に、わ、り、冷、と、し、け、命、と、守、り、を、と、り、
と、宿、と、し、理、の、高、拉、あり、今、平、家、を、族、滅、し、く、大、功、と、建、
て、守、護、と、し、て、君、の、北、陸、り、わ、り、え、下、兵、馬、の、権、と、握、り、
奉、の、や、と、い、ふ、其、時、く、と、え、歡、樂、と、し、て、右、手、と、な、の、
暎、ド、都、よ、と、ま、り、え、く、朝、家、を、親、と、な、ら、く、先、出、と、
終、の、不、信、の、罪、と、り、ま、り、て、必、や、今、日、弟、平、氏、の、大、敵、
頼、朝、義、経、の、勇、果、雄、わ、り、其、中、間、よ、と、ま、り、て、逸、走、と、
患、と、り、ま、り、て、ぬ、不、思、の、見、よ、と、ま、り、と、折、櫻、の、諫、と、

論諫乃者親之しん却之光明と疎下るる見之侍々之光明退
 て勤之云鳴呼吸多なるを教團といふて主將驕士を
 してつづまふ誠とをまふとまひぬ我侍子人多を令する相よわは家
 一は宮門よりゆもまの驢と安控とて詠とんもまをさるるはと云
 まを素意に遠只ぬとせりを平とせし樂ひをさるるもあは
 まぐくたよりまを擇ぶまもあやげとんさずん禍とまわり
 赤松徒へ子房がらも害と免れち宮門にまを厚とては附
 てもんが去留よかわらぬと遂に竹地ともあ跡とてまを影御者
 とまをのあを我侍ゆえまをせし是と尋求れぬも其行一を
 知れ早へまを我侍滅亡の禍とせりとてまをせん同を
 かなし平氏を頼範頼なまを西海まを四海統へ頼朝多を

我侍ゆえまを其身深念よあるる下の其権とせりてまの
 義侍と諫とて傳へ國あをまを我侍と其討と月いかに
 今日のあを後まを滿離とまをの天は下とて是より豊明とゆ水
 かなも其所在るあを後まを後文法多を我侍門より自教大海内
 悉く深念のよに信をて建之を多頼朝と語へ恩と謝と法皇
 の御乳とてゆく數日留のらに高麗王堂の若殿よあはの體とぬ
 まを湖水に舟とてまをまを誦て侍りて頃も満月ほにみは
 あより影に湖水に即て今を波煙の樹まをまを魚圖のけに
 わをと詠へ同信の堂の欄まを居あつていとく奥にまを
 一人白霧山深鳥一聲と吹かまを一人月よりまを樓と朗誦す
 る佛あは燈挑居るる法師のまをまを月よりまを樓と

こそわのこまこと獨まると國をたててをきとててく世の世は法師
はわのいざをたて清きとてわらきとんと徒者とてん其のこま
つらまらん影もわが遺憾のこまなむいざとてくも月をる
の二向を公はる如とてくをて得らなりそ夜をて得らなり
頼朝は此う語りさるに頼朝は孝へ徳を重忠とてたれ
をてよ仰て侍りしといゆるは諸大名もやとてたれし
次の日頼朝お語のほろよまて夜殿系のみいなりけし師とて
必ままをんははわのて明をてをのわらうは侍れしわらわの
い聞たりし此やどの極ありの者ありわらうとて忠に事忠に全
彼まてを諒引んとてをほちれりともわ跡をかくて行方
とてはく水多身徳去後世等とて夢い且て文章は達したるに
系にはをまてはをいんは強をまてとてた諸人へてを疑はとて
しぬ後まを明の高野すてそ見の知まて入蓮華谷よ明遍信とて
ていそかりんばよ入國の殿の侍りてをらるの産まていんはまての
まをらに終らぬといは侍りて後まてまをの業の捨まてて二教
指揮の扱へ其頃書りて此書の入師は多の著まてて文選まてり
かぬとての解かてとてそ命困居のうらぬ扱を侍りてをんまてや
しぬ議ん文武の全才ありとて頼朝の惜まてりともむまり唯我はの同
まてに侍りてりともそ十載の遺恨とてそ釋りてははてり論をそ
まてわらひまて其れ家象條なる禍ありんばまてりて竟法師老後
そては遺蹟の禍を括まてりまてりて又洲のまて侍りてや